

助成年度：平成5年度

[所属] 京都大学 霊長類研究所

[役職] 教務職員

[氏名] 清水 慶子 (他計3名)

[課題]

猿害防止のためのニホンザル生息頭数調節法の開発

[内容]

近年の森林伐採等によるニホンザル生息域の破壊や、野猿公園での影響状態向上による個体数著増の結果、ニホンザルによる農作物や地域住民への被害が多発し、大きな社会問題となっている。しかし、その猿害対策に満足な結果が得られるものは少なく、現状では専ら捕殺に頼っている。しかし、最近のニホンザルの年間捕獲頭数は自然増加数を明らかに上回っており、このままでは、北限のサルとして生態学的にも貴重なニホンザルの人為的絶滅が憂慮される状態にある。筆者らは、ニホンザル生息頭数を適正に保つことが猿害の抜本的な解決につながると考え、猿害防止とニホンザル保護のために、子宮内避妊器具 (Intrauterine Contraceptive Device、IUD) もしくはホルモン剤投与による可逆的な生息頭数の調整法の開発を計画した。本計画により、ニホンザルの生息頭数の調整が可能となれば、猿害の減少に寄与でき、サルとヒトとの共存をはかることが出来ると考えられる。

2年にわたる研究で(1)室内個別ケージ飼育サル、(2)屋外人口飼育群、(3)野猿公園における餌付け群のサルを用い、実験を行った。その結果、銅附加 IUD 装着は、月経周期の長さや月経周期中の性ステロイドホルモン動態、さらに季節繁殖リズムにも影響を及ぼさないことが明らかとなった。また、長期間効果が持続し、器具の抜去により、容易に、しかも直ちに妊娠可能状態となる特色を持つことが明らかとなった。避妊効果については、室内個別ケージ飼育サルに IUD を装着した例では、すべてのサルが妊娠しなかったが、屋外放飼場や野猿公園における実験では妊娠、出産した個体も多かった。おそらく IUD の形状に問題があり、運動量の多いサルや屋外放飼場群において、脱落が容易に起こり、妊娠に至ったと思われたことから、2年次にはサル用 IUD の形状の改良を行い、現在装着実験中である。性ステロイドホルモン剤投与による法は、一回の皮下注射で排卵抑制が数カ月持続し、当該繁殖期の避妊効果が得られることが分かった。しかし、サルの性行動は、性ホルモン以外の様々な要因、例えばサル自身の気質、来歴、相手との相性、環境に大きく左右されることがわかっているので、避妊効果の判定には、さらに例数を増やした検討が必要であろう。

猿害を防止するためには、小手先の解決策のみに留まらず、猿害の真の原因を明らかにし、抜本的な解決法を考えることが必要不可欠である。しかし、現在、その被害がここまで広がっている以上、早急に何らかの策を講じる必要がある。その一助として、本研究において計画された可逆的な避妊効果を持つこれら2種の避妊法は、外科的侵襲も少なく、動物愛護の面からも望ましい方法であり、用いる場所、サルの生息状況などを勘案し、それぞれの状況に合致するよう使い分け、また、形状等および投与量の再検討を行い、避妊率の向上を目指すことにより、野生動物保護の面からも推奨できる方法となり得よう。